

成城大学『経済研究』第 247・248 合併号抜刷（2025 年 3 月）

# 『国富論』における経済発展と世界市場

—「富裕の自然的進歩」論再検討—

立 川 潔

# 『国富論』における経済発展と世界市場

—「富裕の自然的進歩」論再検討—

立 川 潔

I 問題の所在

II ハイランドの経済発展とイングランドの畜牛市場

III アメリカ植民地の経済発展と環大西洋市場

IV ヨーロッパの経済発展と「無尽蔵な市場」

補論 「農業の末裔」としての遠隔地販売向け製造業

V 結びに代えて

## I 問題の所在

アダム・スミスは、『国富論』第3編第1章で、「事物の自然な順序に従えば、およそ成長しつつある社会の資本の大部分は、まず農業に、ついで製造業に、そしていちばん最後に外国貿易に投下される」(WN,380/II.10)と主張している。この「富裕の自然的進歩」論は、農工分業を基礎とした豊かな国内市場を土台とする自立的な国民経済の形成を自然で正常な経済発展とスミスが捉えていた論拠とされてきた。すなわち、農業の発展を基礎にして粗末な工業が起これり、この農工分業が豊かな国内市場を形成し、そして国内市場を基礎に発達した工業が、外国市場向けに洗練された製造品を生産する製造業に成長する。さらに、商業資本が生産資本から分岐し、まず国内商業、次いで外国貿易へと資本投下される順序こそ、全般的富裕を実現しうる急速な資本蓄積と広範な国内市場を基礎とした安定的な

再生産構造を創り出すと、スミスが展望していたと論じられてきた(内田[1976]141-42)。

しかし、この「富裕の自然的進歩」論自体は必ずしも一国経済モデルを想定しているわけではない。たとえば、「都市は農村の余剰生産物に対して、すなわち耕作者の生活維持を超える余剰分に対して市場を提供するのであり、そしてその市場で、農村の住民は、余剰の生産物を自分たちに必要な他のものと交換するのである」(WN,376/II.4)という言説は、必ずしも国内の農工分業だけに適用されるわけではなかった<sup>1)</sup>。スミスにとって、農業こそ経済発展を始動する根源的な産業であるが、その余剰農産物に対する市場が存在しなければ、この余剰生産物は無価値となり、生産されなくなってしまう<sup>2)</sup>。国内に「最も貧しく野蛮な国ですら行われる粗末な家内製造業 (household and coarser manufactures)」(WN,408/II.47)しかない状態では、この余剰農産物に対する広範な市場を期待することはできない。スミスにとって、狭隘な国内市場に代わって余剰農産物に価値を与えているのが国外の広範な市場であった。この広範な市場と結びつくことで、本稿で明らかにするように、スコットランドのハイランド、アメリカ植民地、さらにポーランドやハンガリーも経済発展の契機をつかんでいると認識しているのである<sup>3)</sup>。

畢竟、スミスは、現実の経済活動が、国民経済の枠内で行われているわけではなく、ヨーロッパが「アジア、アフリカ、アメリカの様々な国民のほとんどすべてのための運送業者に、またある点では製造業者にもなっている」(WN,627/II.403)世界市場の中で行われていることを、そして各国各地域の経済発展は単線的な発展経路を辿るのではなく、この「全商業世界 (the whole commercial world)」(WN,247/I.373)の相互依存関係の下でそれぞれの特殊な地理的社会的環境に規定された経路を辿ることを洞察していたのである<sup>4)</sup>。

本稿では、以上の点を論証するために、まずIIで、具体的にスコットラ

ンドのハイランド地方の経済発展についてのスミスの言説を取り上げ、分業の発展には広範な市場が必要であり、地域ないし国内市場が狭隘であれば、当然国外市場が経済発展の重要な契機となるというスミスの認識を確認する。

Ⅲでは、植民地アメリカの経済発展についてのスミス解釈を再検討する。従来の研究では、スミスは、アメリカ植民地を農工間の豊かな国内市場を基礎に急速な経済発展を遂げている典型例と位置づけていると解釈されてきた<sup>5)</sup>。なるほど、スミスは、アメリカでは主として農業に投資がなされることで、急速に経済が発展していることを強調している。しかし、このことは、アメリカの発展が植民地内の農工分業に基づいているとスミスが認識していたことを意味しない。むしろスミスにとって、アメリカ農業の急速な発展は、主としてヨーロッパの製造品との交換を可能にしていた環大西洋市場の存在に依拠するものであった<sup>6)</sup>。アメリカ経済もけっして国内経済というフレームワークの中で発展しているのではなく、世界市場の下で発展しているとスミスが認識していたことを確認する。

Ⅳでは、ヨーロッパの発展にとっての外国貿易および植民地貿易に関するスミスの見解を再検討する。従来、この点についてのスミスの見解は、主に資本の自然的投下順序論ないし重商主義批判の観点から論じられ、それらがヨーロッパの経済発展にとって極めて積極的な意義を与えられていたことが必ずしも十分に指摘されてこなかったように思われる<sup>7)</sup>。しかし、スミスは、「アメリカの発見と、喜望峰を迂回して東インドに至る航路の発見」とは「人類史上に記録された、最も注目すべき最も重要な二つの出来事」(WN,626/II.402)と極めて高い評価を与えていた。そこで、本節では、アメリカの発見が、「ヨーロッパのすべての商品に対して新しい無尽蔵な市場を開くことによって、新しい分業と技術の改良を引き起こし」、「真の所得と富とを増大した」というスミスの認識(WN,448/II.109)を確認する。この「無尽蔵な市場」による生産力の上昇は、たんにヨーロッパ

の輸出製造業だけではなく、間接的にヨーロッパの農業にも、しかもアメリカと直接貿易関係のないハンガリーやポーランドの農業にも及んでいるのである。それゆえ、これらの諸国では、その狭隘な国内市場に代わって、この「無尽蔵な市場」が経済発展の重要な要因として捉えられていたことを明らかにする。なるほど、たとえば大ブリテンは、植民地独占によって、ヨーロッパ貿易からより遠隔の植民地貿易に資本を移動させ一国の資本蓄積を遅らせている。『国富論』がなによりも独占批判の書であることは周知のところであろう。しかし、スミスによれば、植民地貿易によって開かれる新市場と新事業とは、独占によって失われる生産的労働量よりもはるかに大きな生産的労働量を維持している(WN,609/II.375)。そうであれば、従来理解されてきたよりも、スミスは、外国貿易や植民地貿易が経済発展にとって極めて重要な役割を果たしていると評価していたことになろう。

補論では、第3編第3章に記述されている「農業の末裔」としての「遠隔地販売向け製造業」について再検討する。従来、この「農業の末裔」としての製造業こそ、「外国貿易の末裔」としての製造業と対照的に、国内の農工分業を基礎とした豊かな国内市場の発展を支える農村工業を指示するものと理解されてきた。しかし、この製造業は、水運の便がないという極めて例外的な地理的環境の下で生成したとスミスは認識していたのであって、必ずしも自立した国民経済を支える農村工業と位置づけられていたわけではないことを明らかにしたい。

## II ハイランドの経済発展とイングランドの畜牛市場

スミスは『国富論』第1編第3章で「分業は市場の広さによって制約される」ことを次のように論じている。

「分業を引き起こすのは交換する能力であるから、分業の大きさはつねにその交換する能力の大きさによって、言い換えると、市場の広さによって、

制限されるにちがいない。市場が極めて小さければ、どんな人も、一つの仕事にだけ専念する気持ちにはなれない。というのは、自分自身の労働の生産物のうち、自分自身の消費を上回る余剰部分のすべてを、他の人々の労働の生産物のうち自分が必要とする部分と交換することができないからである。」(WN,31/I.31)

スミスにとって、分業とは、一つの仕事、たとえば釘造りが一つの生業(trade)となることを意味する。つまり釘造りだけで自らの生活資料を稼ぐことができることを意味するのである<sup>8)</sup>。しかし、市場が極めて狭いため、「スコットランドのハイランド地方の僻地の内陸地方は、釘造りのような職業ですら、一つの生業となりえないのである」(WN,32/I.32)。「今日に至るまで、この国[スコットランド]の僻遠過疎の地では、織工や大工は、その職業を営むかたわらで、小農地を耕作しており、農夫と織工という二つの職業を営んでいる」(LJA,86/88)。このようにスミスは農工分離が狭隘な市場によって妨げられていることを問題視していた<sup>9)</sup>。スミスの認識からすれば、「最も貧しく野蛮な国ですら行われる粗末な家内製造業」の存在は、生業としての分業が成立していないことの、したがって市場の狭隘さの証左でもあったのである<sup>10)</sup>。

スミスが『国富論』第1編第3章でこの市場の狭隘さを打破する契機としてあげているのは、水陸輸送であった。とりわけ、安価な大量物資輸送という利点をもつ水上輸送は、広範な市場を確保することで分業を進展させる。

「水上輸送はこのような大きな利点があるので、この便益によってあらゆる種類の労働生産物にとっての市場が全世界に開かれているようなところから、技術と勤労の最初の改良がはじまり、またそうした改良が、その国の内陸地方へと広がってゆくのがはるか後になることも自然のことである。

国の内陸地帯では、長い間、その周辺の地方以外にはその財貨の大部分にとっての市場がなくて、海岸や航行可能な河川から隔絶されていた。したがって、内陸地帯の市場の広さは、長い間、その周辺の地方の富と人口密度に比例せざるをえなかったし、その結果内陸地帯の改良は、その周辺の地方の改良よりもつねに遅れざるをえなかった。わが北アメリカ植民地では、プランテーションはいつでも海岸かまたは航行可能な河川の岸に沿ってつくられていて、そこからかなりの距離の奥地にまで広がったことはほとんどなかったのである。」(WN,34/ I.34-35)

明らかに、スミスは、「技術と勤労の最初の改良」、すなわち文明が開化したのは「市場が全世界に開かれているような」水運の便が良好な地域であること、そしてその改良が内陸地域に広がっていくのはかなり後になってからであることが自然であると認識している。分業が自然に拡大するためには、水上輸送などによって開かれた外部の広範な市場の存在が欠かせないのであり、内陸地帯はその市場の狭隘さゆえにその発展は遅々としたものとならざるをえないのである<sup>11)</sup>。しかも、この認識は文明の発祥という歴史的事象について妥当するだけではない。引用から明らかのように、スミスは、北アメリカ植民地でもまず海岸かまたは航行可能な河川の岸に沿ってプランテーションが形成されたことに注意を喚起している。このことから、スミスが、アメリカ経済の発展を植民地内の農工分業ではなく、海外との交易に依存した発展であったと認識していたことを読み取ることができよう。しかし、この点は次節で改めて取り上げる。

それでは、「人口が希薄な内陸地域」で、しかも良好な水上輸送の便もないハイランドが発展の契機を掴んだのは何によるとスミスは見ていたのであろうか。

スミスは、発展の契機は、スコットランドがイングランドとの合邦によって、ハイランドの畜牛がイングランドという広範な市場を獲得したことに

よるのだと主張していた。スミスによれば、「合邦はハイランドの畜牛にイングランドの市場を開いた。その通常の価格は現在、今世紀の初めよりも約3倍になっていて、ハイランドの多くの土地の地代は同期間に3、4倍に高まった」(WN,165/I.249)。瞠目すべきことに、スミスはこの畜牛の価格上昇こそスコットランドが合邦によってえた商業上の最大の利益であると強調している。

「スコットランドがイングランドとの合邦から得られたすべての商業上の利益の中でも、畜牛の価格の上昇こそおそらく最大のものである。それはハイランドの全地所の価格を上昇させたばかりではなく、おそらく低地地方の改良の主要な原因でもあった。」(WN,239-40/I.361)

このように、合邦によるイングランド畜牛市場の開放こそが、ハイランド畜牛の価格を上昇させ、低地地方をも含めたスコットランドの土地改良の誘因を生み出したと認識しているのである。

「もしスコットランドの畜牛がつねにスコットランドの市場に限定されていたならば、おそらく、畜牛の価格が畜牛を飼育する目的で土地を耕作することが利益となるほど高く上昇するなどということはほとんど不可能であったであろう。」(WN,237-38/I.357)

このようにハイランドのような国内市場の狭隘な「人口が希薄な内陸地域」での経済発展は外部の市場を不可欠としている<sup>12)</sup>。イングランドという広大な外部市場と結びつくことで、スコットランドはその農業改良に基づく経済発展の可能性を拓いたとスミスは認識しているのであって、狭隘な市場からの内生的な発展を期待してはいなかった<sup>13)</sup>。合邦という政治的決断が市場の拡大を通じてスコットランドの発展に大きく寄与したとス

ミスは認識していたといえよう。

### Ⅲ アメリカ植民地の経済発展と環大西洋市場

Ⅱで確認したように、スミスは、分業は、なによりも海外との交易が可能な水運の便があるところで進展するのが自然であり、それが内陸に広がってゆくのはずっと後になってからであると論じていた。その際、北アメリカ植民地の発展がその典型例としてあげられていたことに留意しなければならない。というのは、これまでのスミス研究では、アメリカこそ、農工分業を基礎とした豊かな国内市場を基盤に急速な経済発展を遂げているとスミスは認識していたと解釈されてきたからである(内田[1981]219)。

言うまでもなく、スミスは北アメリカ植民地の急速な発展の原因をなによりも農業に資本投下されていることに求めている。「わがアメリカ植民地はその資本のほとんどすべてを今日まで農業に用いてきたが、これこそ、この植民地が富裕と偉大に向かって急速に進歩した主要な原因であった」(WN,366/I.573)。しかし、このことは、北アメリカが植民地内の農工分業を基礎として発展したとスミスが認識していたことを意味しない。むしろ、アメリカの農業はヨーロッパ市場と不可分に結びついて発展しているというのがスミスの認識なのであり、本節ではこの点を論証していきたい。

まずスミスのアメリカ植民地の工業の現状認識を確認しよう。スミスはアメリカ植民地の工業の現状を、「農業の進歩に必然的に伴い、各家庭の婦人や子どもの仕事であるような粗末な家内製造業 (household and coarser manufactures) があるばかりで、それ以外には製造業らしいものがまったくない」(WN,366/I.573)とみていた。スミスは「ポーランドでは、一国の存立に不可欠な粗末な家内製造業 (coarser household manufactures) が少数あるだけで、他にどのような種類の製造業もない、という話である」(WN,17/I.15)と述べている。したがって、アメリカの現実の製造業の状況がどうであれ、スミスは、アメリカの製造業もポーランドの状況とさほど変わら

ないという現状認識をもっていたわけである。これらの「粗末な家内製造業」しか存在しない地域は、国内の農工分業を基礎とした市場が不十分であることの証左として捉えられていたことはⅡで示したとおりである。

さらに、新植民地では農業が極めて有利な産業であるので、奢侈品は言うまでもなく、生活必需品の一部ですら輸入製造品に依存しているのであり、製造業に資本が潤沢に投資される段階にはないとスミスは認識している。

「新植民地では、農業は他のすべての事業から人手を引き抜くか、他の事業へ流出しないようにしている。植民地では、生活の必需品の生産についてさえ人手が足りないくらいであり、況してや、人手を奢侈品の製造に向ける余裕などは皆無である。これら二つの種類の製造品の大部分は、自分自身で作るよりも他国のものを購入するほうが安上がりだということをよく心得ている。」(WN,609/Ⅱ.376)

これらの言説から、アメリカ植民地が豊かな農工間の国内市場を基礎に発展しているという現状認識をスミスが抱いていなかったことは明らかであろう。アメリカ農産物と引き替えに製造品を提供しているのはヨーロッパであった。言い換えれば、アメリカ農産物に対する膨大な需要をつくり、アメリカの農業を繁栄させていたのは、植民地内市場ではなく、はるかに広大な環大西洋市場であった。もしこの市場がなければアメリカの農業の急速な発展はなかったであろう。アメリカの経済発展は、国内の農工分業に主に依存してはいなかったのである。つまり、アメリカ植民地も、ハイランドと同様に、国内市場の拡大によって急速な成長を遂げたわけではなく、環大西洋市場の拡大とともに、その重要な一翼として発展したとスミスは認識しているのだ。「植民地が自らの生産物を手放すのはもっぱらヨーロッパの商品を購入せんがためなのである」(WN,576/Ⅱ.321)。スミス

にとって植民地の農産物に広範な市場を提供しているのはなによりもヨーロッパであった。

なるほどスミスは母国による工業抑制政策がアメリカの工業の発展を阻害している側面があることを認めている<sup>14)</sup>。さらに、その抑制政策は、植民地の人々に対する「人類の最も神聖な権利の明白な侵害」であり、「奴隷状態という無礼な刻印」ではあるし、将来の「より進歩した状態」では耐えがたいものとなりうると論じている。しかしスミスは、「これまでのところそれらは植民地にとってあまり有害ではなかった」と結論していた(WN,582/II.332)。

「土地が依然として極めて安価で、その結果労働は植民地では極めて高価であることから、植民地では、ほとんどすべての洗練された高級な製造品は、自分で作るよりも母国から輸入するほうが安上がりなのである。したがって、植民地がそのような製造業を創設することを禁じられていなかったとしても、彼らの現在の改良の状態では、彼ら自身に対する利益への配慮が、おそらく、創設することを思いとどまらせたであろう。」(WN,582/II.331-32)

このように、植民地の人々の自己利益への配慮からして、植民地はこれまで通り、洗練された製造品を自ら生産するのではなく、母国からの輸入に頼ることになる。植民地の農業生産物の多くはこうした母国からの製造品を獲得するために生産されているわけである。スミスが、植民地の農業の発展は、植民地内の農工分業に依存しているのではなく、植民地農産物に対するヨーロッパの膨大な需要に依存していると認識していたことは明らかであろう<sup>15)</sup>。

さらに、スミスによれば、アメリカ植民地は、洗練された工業品だけではなく、商業活動も信用もまた母国に依存している。植民地は商業資本も

不足しているのであり、母国からの資本によって支えられている。「アメリカの輸出も沿岸交易もその大部分は、大ブリテンに住んでいる商人の資本によって行なわれている」のであり、ヴァージニアやメリーランドなどの州などでは小売商も母国資本によって担われている（WN,366-67/I.573）。こうした母国資本が植民地の経済発展を支えている。さらに、「ブリテンの財貨は一般にかなり長期の信用で植民地住民に前渡しされ、後に、一定の価格で評価されたタバコで支払われる」（WN,941/Ⅲ.429）と述べていることから明らかなように、スミスは環大西洋貿易が「信用の帝国（Empire of Credit）」（Bowen [1996] 92）としての性格をもつことを見落としてはいない（立川 [2023a]；[2023b]<sup>16</sup>）。

「もしわが北アメリカ植民地および西インド植民地に属する資本だけがその余剰生産物の輸出に用いられてきたならば、これらの植民地の進歩ははるかに遅々たるものだったにちがいない。」（WN,380/Ⅱ.10）

母国の資本が植民地の卸売業、さらには小売業まで支えていることは、一つには、独占によって植民地の利潤率が人為的に高められたことによるものであろう。しかし、かりに重商主義的な規制がなくとも国内への資本投下よりも高い利潤が期待されるならば、外国貿易や植民地へ母国の資本は投下されるはずであろう。この点は次節で改めて検討する。

いずれにしても、植民地は自らの農産物市場を確保するための商業資本や信用を十分にもっていない。しかも、スミスの認識によれば、北アメリカ植民地は粗末な製造業が遠隔地向け製造業に転化するような段階にも達していない。換言すれば遠隔地向け製造業が展望されるには、あまりに遠隔地向け農産物生産の利益が大きいためである。

「わが北アメリカ植民地では、未開墾の土地が依然として手頃な値段で購

入しうるので、遠隔地向け販売のための製造業は、いかなる都市においても未だに確立されていない。職人が、近くの農村に供給する自らの事業を遂行するのに必要な資本よりも少しでも多くの資本を獲得したならば、北アメリカでは、彼はそれでもって遠隔地向け販売のための製造業を確立しようと試みるのではなく、それを未開墾地の購入と改良に用いる。」(WN,378-79/II.8)

それゆえ、スミスは、アメリカにおいては未開墾地の購入が手頃な価格で購入できる間は、ヨーロッパに対する農産物供給地としての発展を展望していたと言っているであろう。アメリカが豊かな市場に恵まれているとするならば、それは大西洋を股にかけた都市と農村の分業に基礎をおいた広範な市場であり、アメリカ内部の市場ではなかったのである<sup>17)</sup>。従来解釈と異なって、スミスは、アメリカ経済は対外依存度が極めて高い経済だと考えているのである。

以上検討してきたように、アメリカ植民地はなによりも付加価値生産的な農業に資本を集中させることで最も急速な経済成長を遂げているとスミスは認識している。しかし、このことはアメリカ国内の農工分業に基づく国内市場に依拠するものではなかった。況してやこの生産資本から貿易資本が分岐されたとは認識されていない。スミスにとってアメリカ植民地の急速な発展は、ハイランドの発展がイングランドの畜牛市場に支えられていたのと同様に、植民地農産物に対するヨーロッパ市場の存在によって支えられていたのである。しかも、それはヨーロッパの製造業だけではなく、そのような市場をアメリカ植民地に提供している母国の商業資本にも支えられている。ヨーロッパの購買力と資本に支えられてはじめて北アメリカ植民地は急速な経済成長を遂げることができているのであり、また次節で見るように、ヨーロッパも同様にアメリカという「新しい無尽蔵な市場」によって国内の生産力を増大させていると認識している。スミスにとって、

北アメリカ植民地の繁栄は、そしてヨーロッパの繁栄も、「全商業世界」というグローバルな相互依存関係の中で達成されているのである。

#### IV ヨーロッパの経済発展と「無尽蔵な市場」

スミスは、「アメリカの発見と、喜望峰を迂回して東インドに至る航路の発見」とを「人類史上に記録された、最も注目すべき最も重要な二つの出来事」(WN,626/II.402)であると論じている。そしてその主たる便益は、決して金銀の獲得ではなく、広範な市場の創出であり、それによる様々な財の享受と、勤労と分業の増進による高度な生産力の発展とによる真の所得と富の増加であることを強調する (Bloomfield [1973] 456; 渡辺 [2015] 215-19)。

「金銀の輸入は、一国が外国貿易から引き出す主要な便益でもなければ、況してや唯一の便益などではない。およそどんな地域間にせよ、外国貿易が営まれている場合には、その地域はすべて外国貿易から二つの異なる便益を引き出す。すなわち外国貿易は、自国では需要のない土地と労働の生産物の余剰分を海外に送るとともに、その余剰分と引換えに、国内で需要のある別の財貨を持ち帰るのである。外国貿易は、自国の余剰分に、自国の欲望の一部を満たし享楽を増加させうる他の財貨と交換することで、価値を与えるのである。これによって国内市場が狭隘にもかかわらず、技芸や製造業の分業が最高度にまで成熟することが、どの部門においても妨げられないのである。労働生産物のどれだけの部分が国内消費を超過して余ろうとも、それに対して外国貿易は、いっそう広範な市場を切り開くことで、その国の労働を奨励してその生産力を改良し、年々の生産物を最大限に増加させ、かくしてその社会の真の所得と富とを増加させるのである。」(WN,446-47/II.106-07)<sup>18)</sup>

スミスによれば、なるほどヨーロッパ人の野蛮な不正義はアメリカの原

住民にとって「破滅的で破壊的なものとなった」が<sup>19)</sup>、アメリカの発見は、「ヨーロッパのすべての商品に対して新しい無尽蔵な市場を開くことによって、新しい分業と技術の改良を引き起こした。そして、そのことは、旧来の商業の狭隘な圏内では、その生産物の大部分を吸収する市場の欠落のためにけっして起こりえなかったことである。労働の生産力は改良され、その生産物はヨーロッパのすべての国で増加し、そして、それとともに住民の真の所得と富も増大した」(WN,448/II.109)というのがスミスの認識であった(八幡[2011]53参照)。植民地貿易による無尽蔵な市場の開放によって「国内市場が狭隘にもかかわらず、技芸や製造業の分業が最高度にまで成熟すること」(WN,447/II.106)が可能となる。無尽蔵な市場が狭隘な市場の足枷を取り除いて労働の生産力を飛躍的に増大させたのである。「アメリカが発見されて以来、ヨーロッパの大部分は大いに改善された。イングランド、ホラント、フランスおよびドイツ、さらにスウェーデン、デンマークおよびロシアですら、いずれも農業、製造業ともにかなり発展したのである」(WN,220/I.331)。

なるほど、スミスは植民地貿易の独占が利潤率を人為的に高めることで資本を近隣のヨーロッパ市場から遠隔の植民地にシフトさせ一国の資本蓄積の速度を遅らせているとともに、その再生産構造を植民地に依存した歪んだ構造にしてしまっていることを別括している(WN,604-06/II.368-70)。このように、独占は植民地貿易の好影響を削減しているが、それでもこの独占下でも、それによって失われる生産的労働量よりもはるかに大きな生産的労働を維持しているとスミスは主張する。

「植民地貿易の自然の好影響は大ブリテンにとって独占の悪影響を相殺しておお余りあるほどであるから、現在のような貿易がそのまま営まれるとしてみても、それは大ブリテンにとってただ有利であるというばかりではなく、大いに有利なのである。植民地貿易によって開かれる新市場と新事

業とは、独占によって失われている旧市場や旧事業よりもはるかに大きい。植民地貿易によっていわば生み出された新生産物と新資本は、代金回収の度数のはるかに多い他の貿易から資本が引き揚げられることで雇用から投げ出される量よりもはるかに大きな生産的労働量を大ブリテンにおいて維持しているのである。ところで、植民地貿易は、現状でさえ大ブリテンにとって有利であるとしても、それは独占があるためではなく、独占があるにもかかわらずそうなのである。」(WN,608-09/II.375)

広範な新市場を獲得することで、狭隘な旧市場では実現できなかった深化した分業を達成し、それに伴いはるかに多くの生産的労働者を雇用することになったのである。植民地貿易がもたらしたのは、代金回収の度数のはるかに多い近隣のヨーロッパ内貿易に依拠した部門よりもより大きな生産的労働を雇用しうる投資部門であった。母国の資本が植民地に向かうのは、独占による人為的な高利潤だけではなく、「植民地貿易によって開かれる新市場と新事業」がもたらす資本不足による高利潤という植民地のもつ特異性なのである (WN,109/I.155)。

「新植民地はつねに資本不足 (understocked) である。資本さえ投入すれば、土地を改良し耕作もできて多額の利潤を上げることができるのだが、新植民地には、なかなかそれだけの資本がない。したがって新植民地には、自分たちがもっているよりもより多くの資本に対する不断の需要がある。そして自分たち自身の資本の不足を満たすために、新植民地はできるだけ多く母国から借りようとし、したがって母国に対してつねに債務を負っている。」(WN,601/II.363)<sup>20)</sup>

それゆえ植民地の資本不足による高利潤が解消されるまでは、たとえ独占が解消されても、母国の資本の適切な配分は達成されないことをスミス

は了解している。

「その国にとって、通常の場合はあまり有利ではない遠隔地の投資事業のいずれかにおいて、もしその利潤が上昇し、近場の投資事業が選ばれるのを相殺して余りあるほどになると、この利潤の優位は、あらゆる投資事業の利潤がその適正な水準に戻るまで、近場の投資事業から資本をそちらに引き寄せることになるだろう。しかし、この利潤の優位は、社会の現状において、遠隔地での投資事業が他の事業に比べて資本不足 (understocked) であること、さらに、社会の資本が、その社会で行なわれているあらゆる異なる事業間に最も適切に配分されていないことの証拠なのである。」(WN,629-30/II.407-08)

なるほど植民地貿易は重商主義的な優遇政策のために人為的に高利潤が実現されていたし、スミスの批判の力点がそこにあったことはいうまでもない。事実、スミスは植民地貿易の独占は、「独占さえなければブリテンのあらゆる種々の産業の間に成立したはずのあの自然的均衡を全面的に破壊してしまった」(WN,604/II.368)と述べている。しかし、同時にスミスは「我々は植民地貿易の効果と植民地貿易の独占の効果とを慎重に区別する必要がある。……独占が存在しない場合と比較するなら、その有益さははるかに減じるが、それでもなお全体として大いに有益なのである」(WN,607-08/II.373)と言う。つまり、植民地貿易が隆盛なのは「遠隔地での投資事業が他の事業に比べて資本不足」でもあったからなのである。もし自由貿易によってより広い市場が開かれれば、それは「新しい事業部門の獲得」となり高利潤が獲得されることになる(WN,110/I.156)。

さらに、植民地貿易は直接にはヨーロッパの製造品と植民地の原産物の交換であるが、それはまた、ヨーロッパの製造業がより多くの生産的労働を雇用することでヨーロッパの穀物や畜牛に対する需要を拡大させる。

「植民地貿易によって開かれる新たな市場というのは、ヨーロッパの製造品に対してであって、ヨーロッパの原産物に対してではない。農業はすべての新植民地に適合した事業であり、土地が安価である結果、農業は他のいかなる事業よりも有利である。したがって、土地の原産物が豊富であり、それを他国から輸入する代わりに、通例、輸出すべき自国産の農産物が有り余っているのである。……植民地貿易が間接的にヨーロッパの農業を助長しているのは、おもにヨーロッパの製造業を助長することによってである。植民地貿易によって雇用を増大させるヨーロッパの製造業は、土地生産物に対する新しい市場を生み出す。しかも、ヨーロッパのあらゆる市場の中で最も有利な市場、すなわち穀物と畜牛のための、パンと食肉のための国内市場はこのようにしてアメリカとの貿易を通じて大いに拡大されることになる。」(WN,609/II.375-76)

このように植民地向け製造業における雇用増大がヨーロッパの農産物に対する新たな需要をつくり出すことを、しかも、「あらゆる市場の中で最も有利な市場、すなわち穀物と畜牛のための、パンと食肉のための国内市場」を拡大させることをスミスは指摘する。

さらに、スミスは、アメリカ植民地貿易は、その直接的な関係国だけではなく、それが派生的につくり出す市場を通じて、ヨーロッパ全体における農工分業を深化させ生産力を上昇させていることを強調する。砂糖、チョコレート、タバコというアメリカの余剰生産物は、直接アメリカに自らの余剰生産物を輸出していないハンガリーやポーランドでも消費されている。それはハンガリーやポーランドの余剰農産物が、他国のアメリカ向け輸出製造業を通じて需要されるからである。つまり、「もともとアメリカの余剰生産物によって発動されたあの貿易の循環を通じて市場を見出すことになる」からである。こうして「アメリカの商品はハンガリーやポーランドの商品の価値を引き上げ、したがってそれらの増産を促進することに

貢献する」(WN,591-92/II.345-46)<sup>21)</sup>。さらに、アメリカに輸出もしておらず、しかもアメリカ商品を消費していない国ですら、アメリカとの貿易で生産力を増大させた国からの豊富な商品を楽しむことで「必然的に享楽を増大させてきたし、同様に勤労を増加させた」。つまり、「これらの国々の勤労の余剰生産物と交換に様々な種類のより多くの新しい等価物がこれらの国々に与えられ」、「より広大な市場がその余剰生産物に対して生み出されてきたのであり、その結果その価値を引き上げ、そのためその増加も促してきた」。こうして「大量の商品が年々ヨーロッパ商業の大循環(the great circle of European commerce)に投げ込まれ、その様々な循環を媒介にしてその圏内の全ての諸国民の間に分配される。そして、これらの大量の商品はアメリカの全余剰生産物によって増大させられてきたにちがいないのである。したがって、この生産物の総量が増えるにつれて、各々の国民の手元に流れ込む分も多くなり、彼らの享楽も増え、その勤労も増大したのである」(WN,592/II.346-47)。つまり、アメリカとの交易によって、独占の悪影響にもかかわらず、ヨーロッパのあらゆる国の享楽と勤労が増加したことをスミスは強調する。「植民地の余剰生産物こそ、ヨーロッパがアメリカの発見と植民地化から引き出す享楽や勤労のあらゆる増大の根源なのであり、母国の排他的貿易は、この源泉を、さもない場合よりもむしろ衰勢させてしまっているのである」(WN,593/II.348)。

各国各地域の市場をその構成要素とする世界市場が拡大していくことで、ハンガリーやポーランドの農業生産力も上昇していく。ハイランド地方がイングランドの畜牛市場によって、そしてアメリカの農業が環大西洋市場によって発展したように、「一国の存立に不可欠な粗末な家内製造業」しかないポーランドやハンガリーでも、これらの国の農産物に対するヨーロッパ市場の拡大を通じて、農業生産力を上昇させ「真の所得と富」を増大させる。もしこれらの諸国が国内の農工分業にその発展を依存していたならば、このような生産力の発展は期待しえなかったであろう。スミスは、こ

これらの国の発展を「もともとアメリカの余剰生産物によって発動されたあの貿易の循環」の一環に組み込まれたことに求めているのであって、これらの諸国の国内市場の自立的拡大から論じているわけではなかったのである。そして、改めて確認しておきたいことは、海外市場を重視していると考えられている重商主義的な貿易独占は、むしろこの巨大な海外市場を衰勢させて、享楽と勤労の増大を鈍化させてしまっているというのがスミスの認識であったことである。分業による生産力を増進させ社会の真の所得と富を増大させる世界市場を拡大する上でも重商主義は批判されるべき対象なのである。

### 補論 「農業の末裔」としての遠隔地向け製造業

『国富論』第3編第3章で、スミスは、起源の違いによって遠隔地向け製造業には二つの種類があることを指摘している。すなわち、外国貿易の末裔と農業の末裔としての遠隔地向け製造業である。従来の解釈によれば、スミスのいう農業の末裔としての遠隔地向け製造業こそ、都市の前期的商業資本支配やギルド規制から解放されたイギリスの農村工業を表現したものであり、この農村工業こそ豊かな国内市場を形成した製造業と理解されてきた（大塚[1969] 57-61）。すなわち、地元の原材料をもとに発展してゆく農業の末裔としての製造業こそが、地域的な農工分業を土台として、豊かな国内市場を形成し、ついには洗練された製造品を生産する輸出製造業にまで発展していく。そして、こうした生産資本から分岐し、その生産活動を支える商業が、製造業の発展とともに、最初は国内商業として、そしてついには外国貿易をもその活動の場として拡大していく。このような自立的な経済発展のまさに礎をなす製造業としてスミスは農業の末裔を把握したというのである。しかし、スミスのいう「農業の末裔」は必ずしもギルド規制から解放され豊かな国内市場形成の起動点としての農村工業を表現したものとはいえない。この補論ではこの点について検討を加えていく。

スミスは、イングランドが、もともと外国貿易や遠隔地向け製造業が他国に比べて有利な地理的条件にあったことを強調している。

「イングランドは、元来地味が肥沃であり、全国土の面積の割に沿岸面積が広く、さらに国土を貫流して最も内陸の地方 (the most inland parts) の一部にさえ水運の便を供している可航河川が多数あるので、外国貿易や遠隔地向け製造業や、そしてこれら両者がもたらしうるあらゆる改良を行う場所としては、おそらくヨーロッパのいずれの大国にも劣らず、本来適している。」(WN,424/II.67)

このようにイングランドは、地味が豊かで水運の便に恵まれているという特有な地理的環境から、さらに、エリザベス治世初期からの商工業への特別な配慮に助けられて、外国貿易の末裔としての遠隔地向け製造業が他のヨーロッパ諸国に比して発展していったとスミスは認識している (WN, 424/II.67)。そしてこの外国貿易の末裔としての製造業が発展することによって、「農業の耕作と改良もまた徐々に進展してきた」。すなわち都市の発展は、農村の原産物に対する需要を拡大し、また「大胆な企業家」である商人による土地改良を促し、さらに農村住民の間に「秩序と善政」を、さらに「個人の自由と安全」を導入することを通して、農業の発展に寄与してきたことをスミスは強調する (WN,411-12, II.51-53)。さらにイングランドでは農業奨励策と、また何よりも「ヨーマン層が法の許す最大限の安全と独立と尊敬とをかちえている」(WN,425/II.68) ことによっても、フランスやスペイン、ポルトガルに比して農業の耕作と改良はいっそう進んでいると主張する<sup>22)</sup>。

以上のことからわかるように、スミスは外国貿易の末裔としての遠隔地販売向け製造業が農業の発展に寄与したことを論じている。土地改良が阻止され、外国貿易→製造業→農業という「不自然的で逆行的な順序」で資

本投下がなされたのは、ローマ帝国崩壊後の大土地所有制度の下での無秩序状態に起因するのであって、「外国貿易の末裔」としての遠隔地向け製造業が成立したからではない。それどころか、外国貿易と「外国貿易の末裔」としての製造業の発展こそが土地の耕作と改良を導いたのであり、「農業の末裔」としての「製造業の拡大と改良は、外国貿易の、そして外国貿易によって直ちに導入された製造業の、最後のそして最大の結果である農業の拡大と改良の結果として以外生じえなかった」のである（WN,408-10/II.47-50）。つまり「外国貿易の末裔」は「農業の末裔」としての製造業を育みこそすれ、その育成を妨げることはなかったのであり、したがって両者は対立関係にあるとは認識されてはいないのである。

ところで、「農業の末裔」の発展条件は、「地味豊かで耕作が容易な」土地であるとともに、従来の研究ではほとんど注意が払われてこなかったが、水運の便の悪い内陸の地方だということである。

「遠隔地販売向け製造業は、時として、あらゆる時代に行われ、最も貧しく野蛮な国ですら行われる粗末な家内製造業が徐々に洗練されていわば自生的に成長した場合もある。そのような製造業は一般にその地方で産出された原料を用いており、しばしば、海岸から非常に遠くはないまでも相当に離れた、そして時には、あらゆる水運からも遠いような内陸の地方で最初に洗練され改良されてきたように思われる。」（WN,408/II.47）

スミスは、先に見たように、イングランド全般の地理的特徴を水運の便の良さに求めていたのであるが、「農業の末裔」では逆に水運の便の悪さをその発展の条件と措定している。「最も貧しく野蛮な国ですら行われる粗末な家内製造業」はすでに述べたように国内市場の狭隘さの証左であったが、その家内製造業がまさに水陸輸送の便の悪さゆえに発展しうるといふ例外的状況が語られているのである。すなわち、この内陸の地方では、

地味が豊かであるために「大量の余剰食糧を生産するのだが、陸上運輸に費用がかかることと、河川航行が不便であることのために、この余剰食糧を外国に送るのは多くの場合困難」となり、そのためその地域の食糧は安価になり、「多くの職人が近隣に定住する」。というのは「彼らはそこで自らの勤労によって他の場所で獲得できる以上の生活必需品や便益品を獲得できる」からである。畢竟、域外から移住した職人によって余剰農産物に対する市場が形成されるのである。こうして「職人は、原産物の余剰部分に、それを水運の便のある場所やどこか遠隔の地に運ぶ費用を節約することで、新しい価値を与える」。つまり、職人もまた運送費をかけずに、従って安価にこの地域の農民に製品を供給しうるために、この原産物の余剰部分は他の地域よりもより多くの工業製品を獲得できるというのである。こうして「彼らはともに土地を一層改良し耕作を一層進めることでこの余剰生産物を増加するように促されるし、増加することができる」。そして、この農工分業が相互の生産力を上昇させ、「長距離陸上輸送の費用」に耐えうる精巧で改良された製造品を生産することができるようになったという。スミスはその具体的な例として「リーズ、ハリファックス、シェフィールド、バーミンガム、ウルヴァーハンプトンなどの製造業」を挙げているが、いずれも「内陸の地方」に位置している(WN,408-09/II.47-49)。

このようにスミスは、「農業の末裔」としての遠隔地向け製造業が展開していく前提条件を、地味が肥沃であるばかりではなく、域外の市場と隔絶されていたために、農産物が域内で安価に提供されたということに求めている。もし水運の便がよければ域外の市場で農産物は販売され、このような安価な提供はなかったのである。つまり、このような製造業が発展するのは、水運の便が悪いという極めて例外的な地理的条件下にあったからである。それゆえ「農業の末裔」は農村工業一般の発展経路を示すものではなかった。さらに、「農業の末裔」にギルド規制から解放された農村工業を読み込むことも困難であろう。なぜならば、スミスは「シェフィールド

ドでは、刃物職の親方は同業組合の規約によって、一度に一人しか徒弟をおくことができないことになっている」(WN,136/I.199) ことを知っていたからである<sup>23)</sup>。なるほど、スミスは農業の末裔を「自然に、そしていわばひとりで成長してきた」としている<sup>24)</sup>。しかし、このことは農業の末裔としての工業が、自然的発展経路を体現するものとして出現し、外国貿易の末裔としての遠隔地向け製造業を乗り越えていくことを意味してはいない。すでに論じたように、農業の末裔としての製造業は外国貿易の末裔が導入した農業の改良の結果なのであり、両者は地理的違いに依存した遠隔地向け製造業の二つの発展経路なのである。このように、スミスは画一的な経済発展を展望しているのではなく、その地域の特殊性、とりわけ地味の肥沃度や交通の便を中心とした地理的な違いに発展が依存することを熟知していたのである。

ところで、すでにこれらの地域内から農工分業が出現したのではなく、域外から職人が定住したとされていたのであるが、さらに域内の生産資本から商業資本が分岐されていくとも認識されていないことも確認しておきたい。たとえば、「農業の末裔」としてのリーズ、ハリファックスの毛織物工業の発展の背景には、ロンドンを中核とする委託販売網があったのであり、さらには海外市場との結びつきがあった (Hudson [1986] chap.7:Heaton [2020] chap.XI 参照)。スミス自身こうした域外の商業資本との結びつきを次のように論じている。

「国によっては、個人の場合と同様に、自国の土地の全てを改良したり、土地の原生産物または製造品の余剰部分をなにか国内で需要のあるものと交換できるような遠隔の市場に輸送したりするだけの十分な資本をもっていない場合がしばしばあるであろう。大ブリテンの多くの地方の住民は、自らの土地のすべてを改良し耕作するのに十分な資本をもっていない。スコットランドの南部諸州の羊毛は、その大部分が、大変な悪路を通過しての

長途の陸上輸送のあげくに、ヨークシャーで加工される。というのもその羊毛を国内で加工する資本が不足しているからである。大ブリテンには、その住民が自らの勤労の生産物を、需要され消費される遠隔の市場に輸送するのに十分な資本をもっていない数多くの小さい工業都市がある。それらの都市に商人がいるとすれば、実は彼らはより大きな商業都市のいずれかに住んでいるより富裕な商人の代理人 (agents) にすぎないのである。」(WN,365-66/ I.571-72)

スコットランドの南部諸州は、自らの羊毛を加工する十分な資本がないので、その余剰羊毛を商品にするためには、イングランドのヨークシャーの工業資本が必要である。同様に、自らの生産物を商品として市場に搬入する商業資本が十分にない工業都市の場合に、ロンドンなどの「大きな商業都市」の卸売資本がその毛織物を市場にもたらしことが有利だとスミスは認識しているのである。「農業の末裔」としての遠隔地向け製造業もその余剰製品を市場にもたらしするためには内部から商業資本が分岐されるのを一すなわち「商業」もまた、いわば「農業の末裔」(大塚 [1969] 34,n.7) となるのを一俟つよりも、域外の商業資本の働きに依存する現実をスミスは認識していたのであり、またそのほうが有利だとスミスは肯定しているのである。アメリカ植民地において「余剰生産物を国外に運ぶ資本が外国資本であるか自国の資本であるかは、さして重要ではない」(WN,379/II.9) ように、域外に余剰生産物を運ぶ資本が域内で不足していれば、域外の資本が卸売を担当することになるし、またそのような方法が有利だと認識していたのである。

## V 結びに代えて

「富裕の自然的進歩」論は、とりわけわが国では、スミスが農工分業に基づく豊かな国内市場を基礎とした経済発展を正常で自然な発展経路と見

なしていた根拠とされてきた。この解釈の背景には戦前日本の狭隘な国内市場と植民地に依存した歪んだ再生産構造に対する批判と戦後経済再建の指針をスミスに見出した先学の貴重な業績があることは言うまでもない。しかし、この解釈には、国民経済それ自体を自立的なシステムと捉える認識枠組が暗黙のうちに前提されていたように思われる<sup>25)</sup>。

しかし、考察してきたように「富裕の自然的進歩」論は一国経済史的な単線的な発展論に収まるものではなかった。スミスは「富裕の自然的進歩」論を「あらゆる文明社会における大規模な商業といえは、都市の住民と農村の住民とのあいだで行なわれる商業である」(WN,376/II.3)という文章で始めているが、この商業は国内の農工分業にのみあてはまるものと限定してはいなかった。本稿で考察してきたように、スミスは世界市場の下で国際的な農工分業が行われている現実を認識していた。さらに国内市場が狭隘な環境下では基幹産業である農業の発展が国外市場に依存してなされることを望ましいものとも考えていた。

本稿では紙幅の関係でアジアとの貿易についてのスミスの見解を検討することはできなかったが、スミスは、東インドは「ヨーロッパとアメリカを合せたよりもより広大な市場」を提供しているのであり(WN,632/II.417)、もし完全な自由貿易がなされれば、「ヨーロッパ商品の年々の生産を増大させ、その結果、ヨーロッパの真の富と所得を増大させるはずのものである」(WN,449/II.111)と論じていた<sup>26)</sup>。

「それらの発見〔アメリカの発見と、喜望峰を迂回して東インドに至る航路の発見〕の結果、ヨーロッパの商業都市は、世界の極小部分(ヨーロッパのうち大西洋沿いの地方と、バルト海や地中海沿岸諸国)のためだけの製造業者や運送業者ではなく、今やアメリカの多数の富裕な耕作者のための製造業者となり、またアジア、アフリカ、アメリカの様々な国民のほとんどすべてのための運送業者となり、またある点では製造業者にもなっている。二

つの新しい世界が、彼らの勤労のために開かれたのであり、そのどちらもが旧世界よりもはるかに大きく、またより広し、またそのうちの一つの市場は日に日にますます大きくなっているのである。」(WN,627/II.403-04)

この言説は、独占を通じて国内産業より外国貿易を人為的に重視した重商主義批判の文脈に収まりきれぬものではないであろう。スミスは、「二つの新しい世界」によって形成された巨大な市場が生産力を増強させ真の富と所得を増大させていることを高く評価していたのである。海外市場を重視していると見なされる重商主義的独占は、実はスミスにとって、このような世界市場を拡大するどころか、この世界市場がもつ「人類の事業の大部分を活動させる偉大な発条の機能を麻痺させる重石」(WN,592/II.347)であったのだ。スミスは、まさにヨーロッパの商業諸国家が主導し拡大しつつある世界市場、すなわち「大商業共和国 (the great mercantile republic)」(WN,443/II.101)を踏まえて世界的規模での分業を論じているのであり、それを前提に経済発展論を展開していた。その際、留意すべきことは、本稿で論じたように、スコットランドのハイランド地方、アメリカ植民地、あるいはポーランドやハンガリーという「一国の存立に不可欠な粗末な家内製造業」しか存在しない地域での経済発展の鍵を、もっぱら農業生産に、しかもなによりも国外市場に依存した農産物生産に見いだしていたことである。スミスにとって農業こそ最も価値生産的な産業であったので、農業に資本投下が集中されることはなんら懷疑されることではなかった。なるほど、アメリカ植民地では精巧な製造業の将来の発展が示唆されていた。しかし、その北アメリカ植民地においても母国による工業抑制政策は「より進歩した状態になれば、それらは、まったく抑圧的で耐えがたいものとなる」とは認められているのだが、農業が高い利潤を生み出している現状では「植民地にとってあまり有害ではなかった」と結論していたのであった。もちろん、スミスは、ヨーロッパにおいて、大土地所有制がもたらし

た長子相続や限嗣相続、さらには借地権の不安定性によって、また商工業を偏重する重商主義政策によって、農業改良が阻害されていることを厳しく批判している。しかし、それにもかかわらず、「人類史上に記録された、最も注目すべき最も重要な二つの出来事」によって切り開かれた広範な世界市場を通じた「社会の真の所得と富の増大」を高く評価し、そして独占を、むしろ、この世界市場がもつ「人類の事業の大部分を活動させる偉大な発条の機能を麻痺させる重石」として批判するスミスにとって、製造業や商業がおもにイギリスやフランスなど西ヨーロッパ諸国に委ねられている現状は必ずしも否定されるべき世界ではないことは上記の引用からも明らかであろう。そうであれば、スミスは、各国各地域の経済発展は、先進・後進という遅速の差を伴う単一の経済発展経路を辿るのではなく、世界の製造業者と運送業者である西ヨーロッパ諸国が主導する現実の世界市場の下でそれぞれの特殊な地理的社会的環境に規定された経路を辿ると洞察していたと言いうるであろう。

※引用表記：引用頁数は原典、翻訳のある場合は翻訳の順で、たとえば (WN 65-66/I.82) のように数字のみを表記した。なお訳文は適宜変更させていただいた。また引用内の傍点および [ ] はすべて立川による。

また、アダム・スミスの著作からの引用は以下の略記を用いる。

*TMS: The Theory of Moral Sentiments, in The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford University Press, 1976:* 水田洋訳『道徳感情論』(上)(下), 岩波文庫, 2003.

*LJA: Lectures on Jurisprudence, in The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford University Press, 1976:* 水田洋・篠原久・只腰親和・前田俊文訳『アダム・スミス 法学講義 1762～1763』名古屋大学出版会, 2012.

*WN: An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations, in The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith, Oxford University Press, 1976:* 大河内一男監訳『国富論』I-III, 中公文庫, 1978.

【注】

- 1) スミスは、「都市は必ずしもその全生活資料を近隣の農村から、あるいは国内から獲得するとはかぎらないのであり、極めて遠方の国から調達する場合もある」(WN,377/II.5)と述べている。もちろん、この言説は農業への投資が阻害されたヨーロッパの発展を念頭においたものではあるが、スミスが農工分業を国内に限定して考えていないことを示している。本稿で主として問題としたいのは、国内農産物に対する需要が国内に十分でない場合についてのスミスの見解である。
- 2) たとえば、ブリテンの製造業者が輸入するバルト海沿岸諸国の余剰生産物である亜麻や大麻は、貿易が行われなければ「いかなる価値もないので、まもなく生産されなくなる」(WN,365/I.571)。このような言説は『国富論』に頻繁に登場する(WN,179/I.271; WN,183/I.276; WN,237/I.356; WN,360-61/I.563; WN,372/I.582-83; WN,577/II.323)。

この論理はヨーロッパ人が「野蛮で未開な民族(savage and barbarous nations)」を商業世界に編入する際の正当化の論理ともなっている。たとえば、肉を主食としている狩猟民や牧畜民は自らの衣服として必要とする以上の生皮を獲得するが、「外国との貿易が全然なかったならば、これらの原料の多くは無価値なものとして捨てられることになるであろう。北アメリカの狩猟民族の間で、彼らがヨーロッパ人に発見されるまでは、おそらくこれが事実であったろう。しかし現在では、彼らはその余剰の毛皮をヨーロッパ人の毛布、火器、ブランデーと交換することで余剰の毛皮になにほどかの価値を与えている」(WN,178-79/I.270)。これは、「世界の未開な諸民族への市場経済の浸透」(八幡[2011]65)についてのスミスの認識を示している。なお、スミスは、ヨーロッパとの遭遇に伴い、東西両インドの原住民が被った恐るべき不幸は「偶然から生じた」(WN,626/II.402)と了解していることから明らかなように、このヨーロッパによる市場経済の浸透それ自体は是認されるべきことと捉えていた。

また、スミスは、市場経済の浸透以前に余剰生産物が生産されるとすれば、それは生産者が隷従状態(servile condition)におかれているからであり、そしてその余剰生産物が支配者の権力の源泉となっていると見なしている。「外国貿易も洗練された製造業もない国では、1年に1万ポンドの所得がある人は、おそらく、一千家族を養う以外には、自らの所得を使い切ることはできまい。そしてこの一千家族は皆自ずと彼の命ずるままとなるのである」(WN,419/II.60)。スミスにとって市場経済の浸透はこの従属関係を解消することを意味していた(WN,418-19/II.59-60)。

『国富論』における経済発展と世界市場

- 3) なによりも余剰農産物が商品として販売されることに、そして最も価値生産的な農業に、経済発展の動因を見出しているスミスにとって、こうした海外需要に依存した商品作物生産が再生産構造上問題を孕むものとは捉えられていない。大ブリテンがその重商主義的な独占政策によって遠隔地である植民地に依存した再生産構造に陥っていることの危険性を指摘しているのと対照的である。
- 4) 当時の西ヨーロッパ経済がグローバルな性格を浸透させていると認識していたことは、文明が進み繁栄している国では農村の日雇労働者が着ている毛織物の上衣ですらも、「多くの商業と航海」を通じて「世界の果ての地方からやってくる」薬剤などを必要とするとの言説から明らかであろう（WN,23/I.21; WN,407/II.45）。
- 5) たとえば、内田によれば、「土地所有の桎梏なく、農業を起点とする国内市場のひろく豊かな形成がおこなわれたアメリカ」では、「農業の末裔たる粗雑な工業は、本国イギリスのあらゆる抑圧制度にもかかわらず、国内市場を基礎にしてゆめのない発展をとげてきた。そして、その強固な基礎のうえに、いまや精巧な工業を展開せんとするにいたっている」（内田 [1976] 151-52）というのがスミスのアメリカ経済の現状認識ということになる。
- 6) 周知のように、スミスは、新植民地の発展を可能にしている主因は豊富で安価な豊饒な土地と植民者に与えられた自治—「自らの問題を自分で自由に処理することの自由」—にあることを強調している（WN,572/II.313）。しかし、それらとともに、「分業は市場の広さによって制約される」という言説を引き合いに出すまでもなく、スミスは、自らの生存に必要な農産物以上の余剰農産物が生産されるためにはそれらに対する大きな需要が必要であることに注意を喚起している。たとえば、スミスは、「イングランドの植民地は、その余剰生産物、すなわち自分の消費を越えてなお余りある生産物を処分するについて、ヨーロッパの他のいかなる植民地よりも恵まれていて、より広範な市場を与えられてきた」のであり、それは他のヨーロッパ諸国に比べて独占の程度が穏和であり「自由寛大な政策」がとられてきたことによると述べている（WN,574-75/II.319）。
- 7) その例外として、八幡の最近の貴重な一連の研究を挙げるべきであろう（八幡 [2011], [2012a], [2012b], [2014], [2015]）。それらの研究では、いずれもスミスの『国富論』がグローバルな視野で構想された書物であることを緻密な『国富論』読解から論証されている。
- 8) スミスの分業概念は、たんに労働を分割するというだけではなく、「依存（dependency）ほど精神を墮落させ無気力にし、賤しくするものはない。

さらに、自由と独立ほど、廉潔という高貴で寛容な概念を植えつけるものはない」(LJA,333/355)と言うスミスにとって、たとえば針金を切ることも、あるいは「ピンを紙に包むのさえ、それだけで一つの生業 (trade)」(WN, 15/I.11)となること、つまり経済的に自立できることが、他者への依存から脱却できるために、極めて重要であった。それゆえ分業労働は労働の生産力を上昇させる主因であるとともに、このような依存からの脱却、独立の物質的な基礎とされているのである。

- 9) スコットランドの僻地に対して、イングランドはすでに家内工業段階からほぼ脱していると認識している。「粗末な製造業 (coarse manufacture) は、おそらくイングランドでも昔は、技術と製造業が幼稚な状態にある国々において常に行われてきたのと同じやり方で行われていたであろう。それはおそらく家内工業 (household manufacture) であり、その仕事の各部分は、ほとんど家族全員の手で個々別々に折にふれて行われていたであろう。だがそのために、それは彼らが他に何もする仕事がないようなときにだけ行われる仕事になっていたのであって、彼らの生活資料の大部分がそれから引き出されるような主要な仕事にはなっていなかったのである」。言うまでもなく、分業労働を依存からの脱却の要因と考えるスミスにとって、商品の生産が「自分の生活資料の全部ないし主要部分を得ている人々によって営まれる」ことが重要であった (WN,263/I.399)。スミスは「家内工業制 (domestic system) をぜひとも取り除くべきものと考えた」(Thirsk [1978] 150/236) のである。

なお、スミスは、一つの生業となっている分業労働と対照的に、半工半農の労働は、仕事と道具を頻繁に変えるために「必然的に時間を空費したり、無精にしかも不注意に仕事をするという習慣を身につけるので、そのためほとんどいつも怠惰でものぐさになり、最も緊急の場合にも活発に働くことができなくなる」(WN,18-19/I.17) と厳しく批判していることは周知のところであろう。

- 10) 周知のように、ジェイムズ・ステュアートは、「農業の乱用 (abuse of agriculture)」と見做した農工未分離の経済を解体することを課題としていた (Steuart [1967] I.111/I.77)。それに対してスミスは農工分離がなされた後の商業社会の法則を解明することを課題としていたと解釈されることがあるが (小林 [1976] 158)、スミスもまた農工分離を推進することを主要な課題の一つとしていたことは明らかであろう。ジェイムズ・ステュアートが農工分離は為政者が創り出すべき課題と考えていたのに対して、スミスにとって、この分離を妨げているのは、市場の狭隘さであった (Perelman [1983] 150-51)。それゆえ市場の拡大は、「分業が完全に確立した」商業社会におけ

る分業労働の高い生産力を可能にする前提としてばかりではなく、農工未分離の経済を解消する方法でもあったのだ。ここでいう農工未分離の経済とは、自らの生活資料の主要な部分を自家生産するとともに、余剰生産物をおもに定期市などで販売し自給できない財を獲得する経済である。スミスの定期市批判はこうした農工未分離経済批判をも射程に入れているように思われる。この点については別稿を用意したい。

- 11) したがって、外部の市場と結びついていない「アフリカの全ての内陸地方、黒海とカスピ海のはるか北にあるアジアの内陸地帯、つまり古代のスキタイ、現代のタタールやシベリアは、世界のどの時代においても、現在われわれが見るとおりの、野蛮で未開な状態に留まっていると思われる」(WN,35-36/I.37-38)と述べているのであり、外部の市場と結びつかなければ、それらの地域が野蛮状態を脱しうるとは想定されていない(Williams [2014] 290 参照)。
- 12) ハイランドの畜牛をイングランド市場に結びつけていたのは牛追い(drover)であった。牛追いは陸路を通して牛を移動させる。「あらゆる商品の中で、陸上よりも海上輸送のほうが費用がかかるのは、おそらく生きた畜牛だけだろう。というのは陸路を通して畜牛は自ら歩いて市場に行くからである」(WN,459/II.126)。なお畜牛取引と牛追い、さらにその中間業者(middleman)としての性格についてはHaldane [2021]; 飯塚正朝 [1990] 161-67; Checkland [1975] 227 を参照。
- 13) ただし、スミスは、畜牛の価格上昇によってスコットランドの農業改良が一気に進むとは想定していなかった。スミスは、「合邦前のスコットランドの低地地方のどこでもいつも行われていた一般的な農地経営方法」である近耕地・遠耕地制(infield-outfield system)の生産性の低さを詳細に記述したうえで、合邦後の畜牛価格の大幅な上昇にもかかわらず、この経営方法があいかわらずスコットランドのかなりの地域で行われていることを指摘している(WN,238-39/I.358-59)。スミスは、その原因として、無知と旧習への執着とともに、よりよい経営方法を迅速に採用しえない「事物の自然の成り行き」にもとづく「不可避的な障害」を挙げている。その障害とは借地農の貧困と、増加した家畜を維持しうるとして土地改良を同時に進める困難さである。そして「よりよい経営方法の確立に対するこうした自然な障害は長い期間にわたる節約と勤労による他には除去しえない。そして次第に廃れつつあるこの古い経営方法がこの国の全土を通じて完全に廃止されるようになるまでには、おそらく半世紀ないし一世紀以上がかかるにちがいない」(WN,239/I.360-61)と結論している。このように、スミスは、「次第に廃れつつある」ことは認めながらも、スコットランドの改良が緩慢な、しかも困難な道程を辿るで

あろうと予想している。しかし、合邦によるイングランド市場の開放こそが、ハイランドだけではなく、「低地地方の改良の主要な原因」であると述べているように、スコットランドの経済発展の主要な要因であるとして極めて高い評価を与えていたことは否定しがたいであろう。なお近耕地・遠耕地制についてはHamilton [1963] 37-39; 新井 [1967] 参照。

- 14) もちろん、スミスも工業抑制政策がまったく無害だとは考えていなかったことは、次の引用から明らかである。「大ブリテンは、アメリカ製の帽子、羊毛、毛織物を、一地方から他の地方へ、水路で移出することはもちろん、馬の背や荷馬車で陸路を運ぶことすら禁止している。こうした規制のために、アメリカ植民地では、遠隔地販売のための商品の製造業の確立が効果的に阻まれ、植民地の工業は、このようにして、家族が通常自ら使用するための、あるいは同じ地域の近隣の一部の人々が使用するような粗末な家内製造業に限定されている」(WN,582/II,331)。ここでは市場を狭隘化させている重商主義的な規制がアメリカ植民地における遠隔地向け製造業の発展を阻害するとともに生業としての分業労働を妨げている家内工業制を存続させてしまっているという認識を示している。
- 15) 大陸植民地へのイングランドの輸出は1720年から1770年の間に50パーセント以上増大し、1750年から1770年の間の最も急速な増加とイギリス製造品に対する一人あたり支出は、アメリカ人口の驚異的な成長と等しいか、おそらくそれを凌いでいたといわれている(Breen [1993] 484)。こうした背景には、たんに母国からの生産財の輸入(WN,588/II,340)だけではなく、母国の「消費革命」(McKendrick, Brewer & Porter [1982] 9)の影響を受けたイギリス的な消費文化が植民地の住民の間に広範に広がったことがあったと言われている(Breen [1986])。スミスも「アメリカと西インド諸島では、白人は最下層の人々でさえ、イングランドの同じ階層の人々よりもはるかによい暮らしをしているし、彼らが日常態に享受している一切の奢侈品の消費はおそらくずっと多いであろう」と述べている(WN,939/III,425)。なお、大ブリテンに対する植民地側の収支の赤字とその北部と南部植民地の相殺方法の違いについてのスミスの認識はWN,942-43/ III,430-32を参照。
- 16) グリーンによれば、イギリス領北アメリカ植民地の典型例は、従来考えられてきたようにマサチューセッツ湾とコネティカットという主要なニューイングランド植民地ではなく、ヴァージニアとメリーランドのチェサピーク植民地であった(Greene [1988])。この視座は今日アメリカ経済史研究において広く支持されている(和田 [2003] 参照)。労働不足と肥沃な土地の豊富さによる高賃金と高利潤というスミスの北アメリカ植民地像(WN,109/I,155; WN,

565-66/II.303-04)も、主として、労働集約的な商品作物であるタバコ生産等を行っていた南部植民地を表象していたと思われる。

- 17) なるほど、スミスは、植民地全体では「互いの生産物に対する一大国内市場 (a great internal market) を形成している」(WN,580/II.328)と述べている。しかし、それは「アメリカと西インド諸島にあるイギリス植民地」との交易のことである。実際、西インド諸島からは主に黒砂糖、ラム、糖蜜が、大陸植民地からは、小麦粉、牛肉、乳製品、塩漬魚、また砂糖の輸出に不可欠な樽板が輸出されていた (Parry [1975] 14; Shepherd & Williamson [1972])。この北アメリカと西インド諸島の貿易がなければ「砂糖植民地も存在しえなかったであろうし、北アメリカ植民地も発展することはなかったであろう」(Pares [1956] 1)とと言われるように、この「一大国内市場」はイギリス帝国の貿易体制の一翼を担うものであった。それゆえ、この「一大国内市場」をもって、従来主張されてきたようなアメリカ植民地内の農工分業に基礎をおいた豊かな国内市場を意味するものとは言いがたいであろう。
- 18) この引用からミントは、スミスは外国貿易に二つの利益、すなわち余剰の捌け口と生産力の向上を認めていると主張する (Myint [1958])。このミントの捌け口説は通説となっている (WN,446n.53 参照)。しかし、シューマッカーが強調しているように、スミスのいう「余剰」とは、自らあるいは自国が消費する以上に産出した交換を目的とした生産物のことであり、市場がなければ生産されない生産物である (Schumacher [2015] 584; なお本稿注2も参照)。つまり、引用にある「自国では需要のない土地と労働の生産物の余剰分」とはこの文脈では輸出品を意味しているのである。外国貿易の二つの異なる便益とは、シューマッカーの言うように、「海外に送る」こと、つまり輸出による勤労の増大と、「持ち帰る」こと、つまり輸入による享楽の増大である (Schumacher [2015] 586)。実際スミスは「アメリカの発見と、喜望峰を迂回して東インドに至る航路の発見」とによって「世界の最も遠く離れた地域を大なり小なり結びつけ、これらの地域が互いの欠乏を緩和し、互いの享受を増加させ、さらに互いの勤労を奨励し合うことを可能にするものであるから、一般的傾向としては有益だ」(WN,626/II.402)、さらに「ヨーロッパを一つの巨大な国にみたてた場合、それがアメリカの発見や植民地から引き出してきた一般的な利益は、第一に、ヨーロッパ全体における享楽の増加であり、第二にその勤労の拡大である」(WN,591/II.345)と主張している。また、スミスの余剰生産物は過剰生産の産物でもない。したがって、スミスは過剰生産の誤謬を犯して余剰の捌け口論を展開しているというジョン・ステュアート・ミルの議論 (Mill [1965] III.591-93/III.271-74)も妥当性を欠いている。

- ちなみにスミスの弟子であるジョン・ミラーは捌け口 (vent) という用語を用いているが、過剰生産による余剰の捌け口という意味ではなく、スミスと同様の意味での余剰の輸出先という意味で用いている (Millar [2006] 375)。
- 19) 植民地がヨーロッパとの分業に組み込まれること、さらに先住民が「市場経済の波に洗われる存在」(八幡 [2011] 65) となっていくこと、これらの意味をスミスはどこまで深く洞察していたかについては別途論じられなければならない。反植民地主義的自由主義者としてのスミス像に対する批判、さらにセトラー・コロニアリズムとの関係については Ince [2017]; [2021] を参照
- 20) もちろん、スミスは母国からの直接投資がなされていることも熟知している。「我々はしばしば、ロンドンやその他の商業都市の貿易商の諸団体 (societies) が、わが国の砂糖植民地の荒地を購入するのを目撃している。彼らはこれらの土地が遠方にあり、しかも欠陥のある司法執行のために収益が不確実であるにもかかわらず、ファクターや代理人 (factors and agents) を使って土地を改良し耕作し利潤をあげることを期待している」(WN,174/ I.262-63)。ロンドンの商人の仕事仲間 (associates) の活動については Hancock [1995] を参照。なお Hancock によればスコットランドでは factors と agents は同義語であった (Hancock [1995] 124.n.11 参照)。
- 21) 「今なお封建制度が依然として存在し続けていて、しかも今日においても、アメリカの発見以前と同じくらい惨めな国」(WN,256/ I.386) であり、「隷農 (bondmen)」(WN,386-87/ II.18) が耕作しているポーランドが今後どのような経済発展を遂げうるかについて、発展が地理的社会的環境をはじめ偶然性に大きく依存することを知悉しているスミスは明言していない。しかし、西ヨーロッパの大領主たち (great proprietors) が輸入奢侈品を消費して自らの権威を失墜させたという言説を踏まえて、次の文章を読むときポーランドの封建制崩壊の可能性も否定されてはいないということは言えよう。「商業都市の住民は、より富裕な国々の改良された製造品や高価な奢侈品を輸入して、大地主達の虚栄心を少なからず満足させた。大地主達はそれらを熱心に自らの土地の大量の原生産物で購入した。したがって、当時のヨーロッパの大半の商業は、おもに、より文明化した国の製造品に対して自国の原生産物を交換することであった。こうしてイングランドの羊毛は、フランスのワインやフランダースの上質毛織物と交換されていたのであって、それは、今日ポーランドの穀物がフランスの葡萄酒とブランデーと交換され、またフランスやイタリアの絹布とヴェルヴットと交換されるのと同様であった」(WN, 406-07/ II.44-45)。
- 22) スミスによれば、スペインやポルトガルは、外国貿易は盛大であったが、遠

隔地向け製造業を根付かせなかったので、国土の大部分が未耕のままである。対照的に、「イタリアは、外国貿易と遠隔地向け製造業によってあらゆる地域が耕作され改良されてきたように思われるヨーロッパで唯一の大国である」(WN,426/II.70)と述べていることから明らかなように、貿易活動というよりも外国貿易の末裔としての遠隔地向け製造業こそが農業上の改良を促進したと認識しているのである(WN,409-10/II.49-50)。なお、そのイタリアの商工業が衰退したのは、それが外国貿易の末裔であったからではなく、シャルル8世の侵攻から始まった「イタリアの不幸」(WN,426/II.71)という政治的な理由によるとスミスが論じていることにも留意しておきたい。

- 23) 坂巻によれば18世紀末のリーズには白地織ホール、染色織ホール、トム・ペイン・ホールという3つの週市の発展形態であるクロス・ホールがあった。なるほど『人間の権利』を著わしたトマス・ペインに由来する名称をもつトム・ペイン・ホールで販売していた織元には、正規の徒弟制を経ない「不法な織元」が含まれていたが、最初の2つのホールは正規の毛織物取引所であり、ともに7年季ないし5年季の徒弟制度を経た織元のみがホール内の売台を所有し、毛織物を販売する資格をもっていた。いずれにしろホールでは織元による自由な取引がなされていたのではなく、「ロンドンのブラックウェル・ホールの規制よりもむしろ厳しく、ギルド規制にも類似している」規制があったという(坂巻[2009]242-47)。ちなみにリーズは1626年におもに織物の質の規格を強制する目的で教区の富裕な織元と商人の懇願でチャールズ1世の特許状により法人化された都市であった(Gendron[2021]:Heaton[2020]221-22)。このようなリーズの状況を踏まえれば、スミスはリーズなどの農業の末裔の製造業に様々な規制からの解放を読み込んではいなかったことは明らかであろう。
- 24) IIで見たように、水運の便によって市場が全世界に開かれているようなところから経済が発展するのも自然だと主張していたことを考慮すれば、スミスの必然性としての自然概念は、時空を越えた概念というよりも、地域的な特殊性を踏まえた多様性を包み込んだ概念ということになるであろう。このことは見えざる手の思想にも妥当する。『道徳感情論』では地主の虚栄心による奢侈的な消費が、意図せずして、商品として奢侈品を供給する職人たちに生活必需品を提供するのだが(TMS,184-85/(下)23-24)、『法学講義』にあるように、奴隷制の下では、過大化した財産(overgrown fortunes)の所有者の欲望の対象は奴隷が生産するので、市民たちに仕事を提供されることはない。したがって、「今日の状況においては、このように過大化したすべての財産を粉砕することは、まったく不必要であるばかりか有害でさえあるだ

ろうが、古代においては事情が極めて異なる」ということになる(LJA,196-97/203-04)。それゆえ「われわれの時代の慣習とまったく異なる」状態の下では上記の見えざる手は働かないことになる。

- 25) ボウルズによれば、歴史的証拠から社会発展の理論を導こうとしたジョン・ミラーと対照的に、スミスの「富裕の自然的進歩」は、生産的労働という非歴史的な概念を歴史的な文脈に持ち込んだため、「歴史的証拠を考慮せず定式化したアприオリな概念」(Bowles [1986] 110) となってしまっている。ブレカーも、スミスは、国際貿易による市場の拡大が、各国それぞれが規模の経済を活用することで自らの絶対的優位と余剰能力の内生的な発展を可能にするという国際分業論を展開しているのだが、この国際分業論は、『国富論』第3編における経済発展に関する「自然的進歩」ではなく、むしろ大抵の西ヨーロッパ経済がたどった「不自然な逆行的な順序」と整合的であると述べている(Blecker [1997] 530-31;534)。両者ともにスミスの「自然的進歩」論のもつアприオリな性格を批判している。
- 26) スミスによれば、すでにホランドの資本は、外国債券の買入や外国商人や冒険事業家に対する貸付にまで至っており、「近隣の事業」は「許容できる利潤(tolerable profit)を伴って投下されるような資本はすでに悉く投下されている」。それゆえ、オランダ東インド会社による東インド貿易の独占は、多くの商業資本を東インド貿易から閉め出し、「必然的に最も遠隔地の事業へと流出」させてしまっている。ホランドにとって「東インド貿易は、もし完全に自由であるならば、おそらくこの余剰資本(redundant capital)の大部分を吸収するであろう。というのは、東インドは、ヨーロッパの製造品にも、アメリカの金銀やその他いくつかの生産物にも、ヨーロッパとアメリカを合わせたよりもより広大な市場を提供しているからである」(WN,632/II.416-17)。

#### 【参考文献】

- Blecker, Robert A.[1997] 'The 'Unnatural and Retrograde Order': Adam Smith's Theories of Trade and Development Reconsidered', *Economica*, vol.64, No.255,527-37.
- Bowen, H.V. [1996] *Elites, Enterprise and the Making of the British Overseas Empire 1688-1775*, London, Macmillan.
- Bowles, Paul [1986] 'Adam Smith and the 'Natural Progress of Opulence'', *Economica*, New Series, Vol. 53, No. 209, 109-18.
- Breen, T. H. [1986] 'An Empire of Goods: The Anglicization of Colonial America, 1690-1776', *Journal of British Studies*, Vol. 25, No. 4, 467-99.
- Breen, T. H. [1993] 'Narrative of Commercial Life: Consumption, Ideology, and Community

- on the Eve of the American Revolution’, *The William and Mary Quarterly*, Vol. 50, No. 3, 471-501.
- Checkland, S.G. [1975] *Scottish Banking: A History, 1695-1973*, Glasgow, Collins.
- Davis, Ralph [1973] *The Rise of the Atlantic Economies*, Cornell University Press.
- Gendron, John H. [2021] ‘Employment preservation and textile regulation in early modern England, 1550-1640’, *Journal of Institutional Economics*, 17, 529-43.
- Greene, Jack, P. [1988] *Pursuits of Happiness: The Social Development of Early Modern British Colonies and the Formation of American Culture*, University of North Carolina Press: 大森雄太郎訳『幸福の追求：イギリス領植民地期アメリカの社会史』, 慶應義塾大学出版会, 2013.
- Haldane, A.R.B. [2021] *The Drove Roads of Scotland*, Edinburgh, Birlinn Origin.
- Hamilton, Henry [1963] *An Economic History of Scotland in the Eighteenth Century*, Oxford, Clarendon Press.
- Hancock, David [1995] *Citizens of the world : London merchants and the integration of the British Atlantic community, 1735-1785*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Heaton, Herbert [2020] *The Yorkshire Woollen and Worsted Industries*, Alpha Editions.
- Hudson [1986] *The Genesis of Industrial Capital: A Study of the West Riding Wool Textile Industry, c.1750-1850*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Ince, Onur Ulas [2017] ‘Adam Smith, Settler Colonialism, and Cosmopolitan Overstretch’, [https://ink.library.smu.edu.sg/soss\\_research\\_all/18](https://ink.library.smu.edu.sg/soss_research_all/18)
- Ince, Onur Ulas, [2021] ‘Adam Smith, Settler Colonialism, and Limits of Liberal Anti-imperialism’, *The Journal of Politics*, vol.83, No.3, 1080-96.
- McKendrick Neil, Brewer John and Plumb, J. H. [1982] *The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England*, Bloomington, Indiana University Press.
- Meeropol, Michael [2004] ‘Distorting Adam Smith on Trade’, *Challenge*, Vol. 47, No. 4, 78-90.
- Mill, John Stuart [1965] *Principles of Political Economy: with some of their Applications to Social Philosophy*: in *The Collected Works of John Stuart Mill*, Volume II-III, Toronto: 末永茂喜訳『経済学原理』I-V, 岩波文庫, 1955-63.
- Millar, John [2006] *An Historical View of the English Government: From the settlement of the Saxons in Britain to the revolution in 1688*, Liberty Fund.
- Myint, H. [1958] ‘The “Classical Theory” of International Trade and the Underdeveloped Countries’, *The Economic Journal*, Vol. 68, No. 270, 317-337.
- Myint, H. [1977] ‘Adam Smith’s Theory of International Trade in the Perspective of

- Economic Development', *Economica*, New Series, Vol. 44, No. 175, 231-248
- Pares, Richard [1956] *Yankees and Creoles : the Trade between North America and the West Indies before the American revolution*, Harvard University Press.
- Parry, J. H.[1975] 'American Independence: The View from the West Indies', *Proceedings of the Massachusetts Historical Society*, Third Series, Vol. 87, 14-31.
- Perelman, Michael [1983] *Classical Political Economy: Primitive Accumulation and the Social Division of Labor*, Torowa, New Jersey, Rowman & Allanheld.
- Shepherd James F. & Williamson Samuel H. [1972] 'The Coastal Trade of the British North American Colonies, 1768-1772', *The Journal of Economic History*, Vol. 32, No.4, 783-810.
- Bloomfield, A.I. [1973] 'Adam Smith and the Theory of International Trade, in Skinner, A. S. and Wilson, Thomas edited, *Essays on Adam Smith*, Oxford, Clarendon Press.
- Schumacher, R. [2015] 'Adam Smith's "Two Distinct Benefits" from Trade: The Dead End of "Vent-for-Surplus" Interpretations', *History of Political Economy*, Vol.47, No.4, 577-603.
- Steuart, Sir James [1967] *An Inquiry into the Principles of Political Economy: being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations*, in the *Works Political, Metaphysical & Chronological of Sir James Steuart*, vol. I-II, Kelley, New York; 小林昇監訳; 竹本洋他訳『経済の原理 第1・第2編』名古屋大学出版会, 1998.
- Thirsk Joan [1978] *Economic Policy and Projects: The Development of a Consumer Society in Early Modern England*: 三好洋子訳『消費社会の誕生: 近世イギリスの新規プロジェクト』ちくま学芸文庫, 2021.
- Williams, David, [2014] 'Adam Smith and colonialism', *Journal of International Political Theory*, vol.10(3), 283-301.
- 新井嘉之作 [1967] 「十八世紀におけるスコットランドの土地制度について」『史学研究』(広島史学研究会), 100, 127-55
- 飯塚正朝 [1990] 『『国富論』と十八世紀スコットランド経済社会』, 九州大学出版会.
- 内田義彦 [1976] 『増補 経済学の生誕』, 未来社.
- 内田義彦 [1981] 『経済学史講義』, 未来社.
- 大塚久雄 [1969] 『国民経済』, 『大塚久雄著作集』第6巻所収, 岩波書店.
- 小林昇 [1976] 『国富論体系の成立—アダム・スミスとジェイムズ・ステュアート』, 『小林昇経済学史著作集I 国富論研究(1)』所収, 未来社.
- 坂巻清 [2009] 『イギリス毛織物工業の展開—産業革命への途—』日本経済評論社.
- 立川潔 [2022] 『『国富論』における不確実性と投機』『成城大学 社会イノベーション研究』17/1, 73-86.

## 『国富論』における経済発展と世界市場

- 立川潔 [2023a] 「『国富論』における「過剰取引 (overtrading)」—経済に内在する不安定性の認識—」『成城大学 経済研究』239, 83-107.
- 立川潔 [2023b] 「『国富論』における過剰取引と市場の不安定性」『思想』(岩波書店), No. 1195, 25-39.
- 八幡清文 [2011] 「アダム・スミスのグローバリゼーション認識」『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要), 13, 35-73.
- 八幡清文 [2012a] 「アダム・スミスのヨーロッパ主要国経済論—ホランド, グレート・ブリテン, フランス経済の分析—」『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要), 14, 45-74.
- 八幡清文 [2012b] 「アダム・スミスのヨーロッパ後進国経済論: スペイン, ポルトガル経済の分析」『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要), 15, 55-80.
- 八幡清文 [2014] 「アダム・スミスの新興地域経済論—英領北アメリカ植民地経済の分析—」『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要), 16, 169-194.
- 八幡清文 [2015] 「アダム・スミスのアジア社会経済論」『国際交流研究』(フェリス女学院大学国際交流学部紀要), 17, 63-107.
- 和田光弘 [2003] 「植民地から建国へ」『アメリカ経済史入門 第3版』, 東京大学出版会, 所収.
- 渡辺恵一 [2015] 「文明社会史論としてのスミスの経済学」坂本達哉・長尾伸一編『徳・商業・文明社会』所収, 京都大学学術出版会.

(付記) 本稿は 2024 年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。